

ビオトープだより第61号

会員・BAより ビオトープに関する情報を提供します。

特定非営利活動法人
日本ビオトープ協会
<https://www.biotope.gr.jp/>

1. 放棄されて 10 年以上、実家の里山の手入

副会長、北海道・東北地区委員長、主席BA、(株)エコリス 佐竹一秀

はじめに

2023年2月頃より手入れを始めた実家の里山ですが、その後も週に1~2日の作業を実施しています。これまで『ビオトープだより』35、36、39号で、里山の現状報告、近くで行われたスギ植林の伐採、それに併せて実施した屋敷林、境界林の伐採、その後の廃屋の解体撤去等について報告していました。今回はため池の浚渫作業について報告します。

ため池の浚渫が必要？

右上の写真は浚渫前の空撮ドローン写真です。池の大きさは東西方向（写真の左右）で40m、南方方向は20m程あります。その下は2023年秋、我が家のために池にかご罠を設置した時のものです。水が少ない時期ではありましたが、水深5~10cm程しかなくかご罠を完全に水没させられませんでした。ため池を掘ってから約50年、これまでに池干しや浚渫を行ったことはなく、周りからの土砂や落ち葉が流入、堆積で底なし沼状況となっています。このまま放置するとさらに水深が浅くなり、湿地状態になります。湿地環境も重要ですが、これまであったため池や開放水面を必要としている生き物もいます。なお、水田の再開は予定していませんので、水を確保する必要はありませんが、生物多様性確保の観点からも水辺環境は残しておくことは重要と考え、ため池の浚渫を行う事としました。

浚渫工事

2024年の春、工事業者さんに話をすると、まずは堆積している底泥量を把握するために池の水を抜きたいとの事でした。ちょうど井戸改修で重機を使っていたので、右上の空中写真（ため池上空）の赤線部分で道路を切って、矢印の方向に水を抜いてもらう事にしました。道路を切った状態が右の写真です。少し底泥を除去すると、50年前



に掘った時の底部、固い粘土の層が出てきました。その面までの底泥の厚さを計ったところ、深い部分で 80cm 以上もありました。

道路を切り、水を抜き、泥の量を確認し、と、ここまでやってしまったので、もう先に進むしかありません。まずは、池の中央部まで重機が稼働できるように道を作ります（右の写真）。そこから周辺の底泥を南側に移動させ、浚渫した底泥は隣接したくぼ地 2 か所に埋める事にしました。また、ため池の北側はヤナギの低木やクルミの木が生えているので、その手前の底泥を一部残しながら、陸地と接続させるエコトーン（移行帯）とする事にしました。

右の写真が浚渫完了後（2024 年初夏）の写真です。手前側が最も深くなっています。オーバーフロー（赤矢印）まで水が溜まると、水深約 95cm です。写真で底土の見えている付近は 60~70cm の水深になります。なお、ため池の水の排水部分は 2 口とし、オーバーフロー時の排水管（赤矢印）と池干し用の排水管（青矢印）の 2 本設置してもらいました。

右下の写真は満水時の状況です（2024 年初夏）。今後の生物の生育・生息状況に期待していますが、アメリカザリガニ、ウシガエルの侵入も想定されます。これら外来種の動向は次の機会に報告します。



浚渫土中の埋土種子

右の写真は浚渫土を投棄した場所の状況です。中央のドロドロが浚渫土で、この泥の中にはいろいろな植物の種（埋土種子）が入っています。このまま放置して、発芽させてみました。その結果についても、次の機会に報告します。

以上